

昭和五十年五月招集

第三回館山市議會臨時會會議錄第二号

館山市議會

目次

日時	一
場所	一
出席議員	一
欠席議員	一
出席説明員	一
出席事務局職員	一
議事日程	二
開議	二
議案第四十四号	二
議案第四十五号	二五
閉会	三一
本日の会議に付した事件	三一

一、昭和五十年五月三十一日（土曜日）午時十時

二、館山市役所議場

一、出席議員 二十九名

一 番	吉田 勇治郎	二 番	伊藤 幸太郎
三 番	矢野 壽夫	四 番	押元 稔
五 番	黒川 平治	六 番	鈴木 正義
七 番	本間 昭二	八 番	松下 正己
九 番	鈴木 稔	一〇 番	流山 源次郎
一 番	近藤 好雄	一 番	栗原 一雄
二 番	林 豊	二 番	石井 輝久
三 番	辻田 実	三 番	安西 益男
四 番	石井 武敏	四 番	渡辺 軍治郎
五 番	渡辺 昭夫	五 番	和田 一郎
六 番	田中 禄郎	六 番	五十嵐 昇
七 番	菊井 敏博	七 番	西村 真次
八 番	伊賀 多朗	八 番	藤田 益治
九 番	石井 正康	九 番	望月 照正
一〇 番	山口 康		

一、欠席議員 一名

二 七 番 速山 日ネ子

一、出席説明員

第一号に加えて

教 育 長 安田 豊作

一、出席事務局職員

第一号に同じ

教育委員会
庶務課長 汐崎 政光

一、議事日程(第二号)

昭和五十年五月三十一日午前十時開議

日程第一 議案第四十四号

昭和五十年年度館山市一般会計補正予算(第一号)

日程第二 議案第四十五号

昭和五十年年度館山市水道事業特別会計補正予算(第一号)

開

議 午前十時二分開議

○議長(吉田勇治郎君) 本日の出席議員数二十八名、これより第三回市議会臨時会第二日の会議を開会し、直ちに本日の会議を開きます。

本日の議事は、お手もとに配付の日程表により行ないます。この際、申し上げます。本日の議事案件の内容説明はすべて終っておりまうので、直ちに質疑より行ないます。

議案の上程

○議長(吉田勇治郎君) 日程第一、議案第四十四号昭和五十年年度館山市一般会計補正予算を議題といたします。

議案第四十四号 昭和五十年年度館山市一般会計補正予算(第一号)

質疑応答

○議長(吉田勇治郎君) 御質疑を願います。

○一四番(石井輝久君) 議案第四十四号について、とりわけ昭和五十年年度予算から昭和四十九年度予算に三億五百余万円の繰り上

げ充用をしようとするに對して御質問を申し上げます。

まず、質問の第一点は、半沢市長さんはいつ頃から本間市政より絶縁して全く違う市政の路線を歩み出したのでしうか。この点を明白にしたいと存じます。

すなわち、昨春秋、半沢市長さんは市長に御就任された直後に館山市の内外に、特に市の職員の皆さま方に対して、本間市政を踏襲される旨を宣言されたと承っておりまして、

しかるに、今回提案されました本議案をみまするに、館山市立館山第一中学校の敷地を売り払うための本間市政最後の昭和四十九年度予算、昨年二月に提案されました、市議会の先賢各位の熱心なる御討議を経た上で可決、確定されたはずであるにもかかわらず、それを売り払わず、ために三億余万円の歳入欠陥を生じたから、昭和五十年年度予算からこれが繰り上げ充用によって昭和四十九年度予算をつくらんとするが如き行為には、にわかに賛成しかねるのでございます。

それはともかくといたしまして、本間市政を踏襲し、一中敷地を当然のこととして売り払って昭和四十九年度予算の執行にあたるべきを、いつの時点から路線の変更をして売り払わない方針をおきめになったのか、承りたいのでございます。

次に、質問の第二点といたしまして、館山市立館山第二中学校の敷地でございます。これは前の衆議院議員の中村庸一郎氏の所有と承っておりますが、その真偽についてお伺いいたします。中村さんの土地かどうかでございます。

それから、その二中の土地が中村さんのものであるといたしますと、その賃貸の契約乃至は売買の契約について伺います。

仄聞するところによりますと、この土地について市当局と中村さんとの折衝の結果、とりあえず借地料か、あるいは売買のための代金としてか、六千万円を支払おうとして拒否され、市が法務局に供託したことがあるやに聞いておりますが、その事実について伺います。そういう事実があったかどうか。その時期はいつ頃だったのか。そしてその後、その供託金はどうなったのか。その点について質問いたします。

次に、第三点として、その時の時点でむこう一年間は館山市立館山第一中学校の敷地はだれにも売られませんという一札を本間前市長が中村さんに入れたやに承っておりますが、その事実ありやという点でございます。

私は、本間前市長さんはやりくりで仕事をやられる。それはけっこうだが、やがて歳入欠陥をきたすおそれが十分にあると警告し、たこが足を食うが如く、やがて市有財産を売らざるを得ないはめにおちいるであろうと、市議会で発言したことがございました。

それはともかくといたしまして、中村さんにむこう一年間一中の敷地を売らないと約束し、その約束期限が切れたあかつきに売ろうともくろんだはずの本間路線がどうしてくずれたのか、明解なる御答弁をいただきたいのでございます。

次に、当然のこととして中村さんは一中の土地を買うべく市に申し入れていたのではないかと思われませんが、申し入れた事実があったか、なかったについて伺います。申し入れてないか、あるかを明らかにしていただきたい。

次に、中村さんだけでなく、何人かがあの土地について買い入

れを希望し、市に対して申し込んだものがあると聞いておりますが、その事実の有無を伺います。

そして、次の質問は、何はともあれ申し込みがあったにもかかわらず、売り払わないとの方針をきめたとするならば、どうして四十九年度予算でもっと早く減額補正をしなかったのかについてであります。

一応、以上を伺った上で、歳入歳出補正予算について御質問申し上げるつもりでありますので、なにとぞ明解なる御答弁をいただきたいのでございます。

○市長（半沢良一君） 石井議員の御質問に御答弁申し上げます。

本間市政の方針、路線を私がかえたのかという御質問でございますけれども、かえるつもりはございません。

本間市長さんが十二年間にわたって福祉を中心として徹底した住民サービスにつとめてこられたわけでございまして、私もその方針を踏襲していくつもりでございます。さらにそれをおし進めながらし尿処理だとか、あるいはごみ処理だとか、そういう社会資本の投下について進めていきたい。本間市政をさらに拡充していきたいと、そう考えているわけでございます。

一中土地を売り払わないことにはいたしましたのは、私が市長に就任いたしましたしていろいろ財政事情を伺いまして、その中で一中土地を売り払うというふうに四十九年度の当初予算でなっていると伺ったわけでございますけれども、私の考え方といたしましてただいま石井議員さんもおっしゃいましたように、なるべく市有財産は売らないで済めばそのほうがいいという考え方もございましたし、さらにたいへんいい場所でございますので、市の立場か

らあれを有効に利用、活用できる方法がないかと慎重に検討いたすべきではないかという考え方に立ちましたものですから、一応売らないことにいたしました。何とか予算のやりくりがつくならばということでそうした考えをしたわけでございます。

二中の土地の問題につきましては、教育委員会の所管でございますので、教育委員会のほうに連絡いたしまして、出席させていただきますかと思っておりますので、お願い申し上げます。

議長 の 報 告

○議長（吉田勇治郎君） ただいま市長より教育委員会の教育長並びに関係課長の出席報告がございましたので御了承願いたいと思ひます。

暫時休憩いたします。

午前十時 十二分 休 憩

午前十時二十二分 再 開

○議長（吉田勇治郎君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

○教育長（安田豊作君） お答えいたします。

二中の敷地が中村さんの土地であったか、これはいつから借りているかということでございますが、第一に、二中というのは北条中学と館山中学が合併して第二中学になったわけでございますけれども、昭和二十三年に移転建築の際、中村さんからお借りして地代は毎年支払っております。六月一日から坪六円二十四銭というのが最初の出だしてございます。その後地代の変化はありましたけれども、昭和四十八年の終りに防音校舍によって永久建築ということによりまして、永久校舍を建てるにあたっては地主

の承諾が必要だ。こういうことで中村さんに市長から売ってもらいたいという申し入れをしたわけでございます。

その結果、昭和四十八年二月二十三日覚書を交換いたしました。その第一項に館山市立第二中学校敷地の中村さんの所有する土地については、これを館山市長本間 譲に売り渡すことを承諾し、甲乙になっておりますけれども、甲は、館山市長はこれを買受けることを承諾したと、これが第一項になっております。金額は坪三万円であると、むこう三年間に一年ごと均等の額で支払いとする。これが第一項に掲げております。

それから、第二項に、これは御質問のあとの部分に触れると思ひますけれども、館山市立第一中学です。一中の敷地内の市の所有する土地については、現在館山市が計画している一中の移転等の事情あるを考慮して当分の間、甲はこの土地を何人にも売却または売却しないことを乙に約束した。こういう約束のもとに第二項にその約をした覚書を交換したわけでございます。

この覚書によって、中村庸一郎さんから館山市長本間 譲殿に対して、この土地に鉄筋コンクリート校舎建築延べ四階建て六、六八四ヘーベを建築することを承諾するという承諾書をいただいております。この承諾書によって建築が開始されたわけでございます。

御質問はさらに、その支払いについてどうなったかというように御質問にも触れているようでございますので、その支払いについて支払いの時期が翌年です。四十八年二月二十三日で、四十九年の三月支払いをするために、市として土地売買契約書の文案についての話し合いを進めている、事務的に進めているうちに市会

その他いろいろの行事もありましたけれども、市としては支払い年度の五月出納閉鎖の五月末をもって支払う話し合いをもっておつたわけでございますが、いや、約束は三月三十一日だといふところに意見の食い違いがちょっとあって、五千六百九十七万六千七百円の第一回の支払いは五月二十九日に法務局の館山支局に供託いたしました。

その後、五十年、本年の三月三十一日に土地売買契約書に館山市長半沢良一と売渡し人の中村庸一郎さんとの間に正式の売買契約書が取りかわされておりまして、これには支払い年月日が五月三十一日で均等に金額が割り振られた文章になって取りかわされておる。こういう経過でございます。

〇企画課長（小沢正治君） 御質問の一中校地の買収申し込みの関係でございますが、これにつきましては正式に市のほうで募集したわけでなくて、いろいろ巷間情報を得た人たちが一応の申し込みを市にできたという関係で、その窓口を一応企画課というようなことで企画課のほうで応じたというような関係でありまして最終的には八つの会社が一応連絡をしてきているということでございますけれども、当時市としての態度が正式に売り払うという計画がはっきりしておりませんでした関係で、これらについての内容調査、正式の受理ということではなくて、一応企画課のほうで関係書類をお預かりするという形でしてあるということでございます。

〇一四番（石井輝久君） ただいま御答弁を承ったんですが、再質問いたします。

市長さんには路線の変更についてもう一点。一中の敷地を売り

払わないと御決意をなさったのはいつ頃か。それから、どうしてもその時点で売り払わないときめたならば、四十九年度予算の中で減額補正をしなかったのかということを先ほど質問の中でうたっておるんですが、御答弁がなかったのでもこの点についてお伺いをしたいと思います。これは答弁漏れでございます。

それから、再質問でございますが、本間路線を変更しないという御答弁でございます。しかしながら、四十九年度予算の執行にあたっては、明らかにもうすでに一中の土地を売り払いをするとする本間路線に対して重大な変更をされていると、予算の執行面において明らかに路線の変更があった。このように理解するものでございます。路線は変更しないという御言明ならば、しないようにどうして売り払わなかったのか。理由は大体推察できます。その点について伺います。

それから、ただいま企画課長さんの御答弁でございますが、企画課では窓口になったけれども、八社申し入れ伝え聞いてきた。しかし計画にはなかった。こういう御答弁のように承ります。

しかし、四十九年度予算に明らかに売り払うということがあるわけでしよう。歳入面で土地を売り払うからということであるわけでございましょう。売り払うという四十九年度の予算が市会で可決、確定されてその執行にあなた方あたってきたわけでしよう。計画になかったということは、これはちょっとおかしいと思いますよ。

それから、ただいま教育委員会のほうで御答弁いただきました。一中と二中との関係、一札入れた問題、私の質問ではむこう一カ年というのは仄聞したというふうに質問したんですが、ただいま

の御答弁で当分の間というように明記されているようですから、その点は私のほうで質問の修正をしますが、教育委員会の御答弁たいへん明確でよくわかりました。

路線の変更の問題につきましてもう一べん承って、それで先に進みたいと思います。

○市長（半沢良一君） 確かに、四十九年度の当初予算を審議する過程において、結論的には売却をするということになっておりますけれども、そのときの様子を議事録等で拝見いたしますと、市議会といたしましては必ずしもこれには賛成ではなかった。市の将来の発展のために、これは市有地として何とか確保すべきではないか。そういう御希望がたいへんあったように考えられます。また、それを売る場合でも市の開発公社に引き受けてもらう方法が講じられるかどうか。そういう希望が非常に強かったようにございます。

それに対しまして、当時の市の見解といたしましては、何としても三億ないとやっていけないんだ。三億程度の売却代金を計上せざるを得ない。しかし、その売却時期については、あるいは売却の方法については開発公社に引き受けてもらうか、あるいは競争入札によって適当な業者にとり二つの方法が考えられるけれども、それは年度最終時点まで慎重に考慮してきめたい。そういう考え方でいたようでございます。

私がいつ売らないことにしたかということでございますけれども、私も予算を執行、議会できめられた予算でございますので、それを執行するためには、これは売らなければいけないかという考えもいたしましたけれども、やはり議会の当時の審議の過程に

おいてそうした経過があったということもございすし、最終ぎりぎりまでに至りまして、売らないことにきめましたので、補正予算を組む時間的ゆとりがなかったわけでございます。

それから、路線の問題でございますけれども、私は政治、市政に対する基本的な姿勢の問題だと考えておりますので、個々の具体的問題につきましては、あるいは本間前市長さんの考え方ややり方と違う点があるかもしれませんが、問題は福祉優先市民サービスという、そういう基本路線の問題だと、基本姿勢の問題だ。そういうふうに考えておりますので、姿勢についてはかわりがない。そう御答弁申し上げたわけでございます。以上。

○企画課長（小沢正治君） 予算で売ることが決定しているんで、当然そういう措置をすべきだという考え方のようでございますけれども、やはり予算で一応計上されておりまして、その具体的な方針、計画、取り扱い内容そういったものがはっきり確立した上に立って、われわれは市長の指示に基づいて行動に入るわけでございますので、そういう関係の具体的な取り扱い関係がはっきり指示を受けない段階で、会社側のほうからそういう要請が出ていたという意味でございます。

○一四番（石井輝久君） それは、企画課長さんの御答弁私どもにはちょっと理解できない面もあります。しかし、これは当然平行線でございますから、これで打ち切ります。

それから、市長さんの路線変更等に対します御答弁、本間路線は変更しないという御答弁でございますけれども、予算の執行にあたっては、私の解釈では重大な変更があったというように理解をかせません。それだけ申し上げまして、先に進ましていただき

ます。

次に、歳入歳出でございますが、まず第一に、歳入の市税、市民税でございます。とりわけ法人市民税二千二百八十七万一千円の補正でございます。これは予算編成時にかくし財源としてこれだけ持っていたのか。あるいは予算編成時に過小見積りをしたのか、一体どっちなんですか、承りたい。いずれにしてもかくし財源であるとは思いませんし、過小見積りであるとも思えない。とすると、非常にこれは取れない二千二百万を今回補正して計上した。このように受け取る受けとめ方もあると思います。この点について承りたい。

それから、法人は現在の景気の不足のもとで、たいてい赤字決算をしているところが多いのでございます。これは財政当局ご存じかどうか。ちょっとお聞かせ願いたいと思います。二千二百万本当に取れるのかどうか。

それから、前年の滞納繰り越しが百三十四万八千円あるはずでございます。前年度にも百三十四万八千円の滞納繰り越しがあるんです。にもかかわらず二千二百万、しかも二月議会で慎重審議可決、確定されたものを、わずか二月を経た今日、いきなり二千二百万も法人市民税をぶっかけるというような、これは一体良心的な予算の補正のしかたかどうか、疑わざるを得ないわけです。

前年度法人市民税は八千九百八十六万六千円しかなかったわけです。当初で見込みましたのは四千九百九十余りプラス見込みして一億三千九百六十三万九千円にしてあるわけでございます。個人のことはあまりこれとは関係がありませんが、個人の滞納繰り越しだって四百万あるわけですよ。この点についてちょっと。これ

は市長さんというよりも、専門家の財政当局から承りたいと思います。

それからもう一つ、地方交付税でございます。地方交付税八千六百万、二十七万端数がありますが、計上してあります。特別交付税は当初でみているのがわずか六千万ですよ。二月の市会に提案された当初予算でわずか六千万しか計上されてないんですよ。それを当初で組んだ六千万よりはるかに上回る八千七百万を計上してくる。一体どういう事情の変化があったのか。国に重大な事情の変更があったのか、特別交付税ですよ。

それともう一つ、こういうことをやっている、また年度内に歳入欠陥のおそれがないかどうか、重大ですので確信のある明解な御答弁を承りたいと思います。

それから、五十年度の予算編成時に基準財政需要額を幾ら見込んだか。同時に基準財政収入額を幾ら見込んだのか。それからもう一点。補正にあたって基準財政需要額を幾らに見込んだか、補正にあたって基準財政収入額を幾らに見込んだか。これだけちょっとお聞かせ願いたいと思います。

それから、市債でございます。市債三千七百八十万円増額しておりますが、これは当初で組めなかったんですか。その点も合わせて伺いたいと思います。一応、以上でございます。

○財政課長（長谷川広治君） お答えを申し上げます。

法人の本年度分につきましては過小か、あるいはかくし財源であるかというような御質問でございますが、私どもはこの予算編成当時におきましては当初の計上額を適正な額というふうに判断をして計上いたしましたわけでございます。

と申しますのは、五十年度の予算編成時点におきます最終の調定額を千四百十萬程度というふうに積算をいたしたわけでございます。これは御案内のように毎月毎月徴収されてきますわけでございまして、年度の最終にならなければ最終調定が明確にわからないというような税でございます。四十九年度の最終調定額は一億三千百十萬程度になったわけでございます。したがって、四十八、四十九年度の伸長率が四五%八幾つというふうな伸長率になっておるわけでございます。

したがって、景気の動向等も考え合わせまして、二四%程度の伸長はなおかつみられるのではないかとということで逆算をいたしまして、年間の調定額を一億六千三百五十萬程度にはじいたわけでございます。そうして、残りの差額と申しますか、当初予算との差額の二千三百二十一萬円を調定額といたしまして、収納の率を九八・五四%というふうにおさえますして、二千二百八十七萬一千円を計上いたしたわけでございます。

それから、特別地方交付税の關係でございしますが、御案内のように特別交付税と申しますのは、年々変更あるいは交付の基準そういうものがかわるわけでございます。本年度現在の時点に立っているいろいろ積算をいたしたわけでございますが、四十九年度の特別交付税につきましては調整された額が約九千九百萬程度でございます。五十年度におきましては、そのうち約八割程度が解除されるというふうな予想をもちまして、その八割が五十年度には一〇%程度の伸長があるのではないかとということで特別交付税の総額を一億四千六百二十七萬というふうに積算をいたしたわけでございます。その当初の計上額との差を八千六百二十七萬計上したわ

けでございしますが、これは御案内のように今、国でも問題になっておりますが、国も歳入の欠陥につきまして、地方交付税の減額あるいは調整をいたしたいというふうに考えているようでございます。これは私どもだけでは処置はできませんので、現在の見通しの上に立ちますと、この程度の数字になります。年度最終時点にならなければ例年のとおり確定数字ということとは申されない事情でございします。

それから、基準収入關係でございしますが、これも八月にならないうと、はっきりわかりませんが、昨年の一九%程度の伸長というふうな積算で考えております。

それから、市債の關係でございしますが、これは例年御説明申し上げますとおり、これも年々評価の基準、それから国の起債のワク、そういうものが地方財政計画あるいは起債計画の上できまつてまいりますので、それに前年度、五十年で申しますと四十九年度の実績あるいは基準等を参照に当初計上いたすわけでございますが、その後新しい国のワクあるいは基準等の改定、そういうものに基きまして年度間常に補正をいたしているような事情でございしますので、御了承たまわりたいというふうに考えます。

〇一四番（石井輝久君） 財政課長さん、答弁漏れがございしますよ。

第一点の法人市民税の關係でも歳入欠陥のおそれはないかという質問があったはずですよ。慎重に答えてもらいたいと思います。

それから、今の交付税の問題でも予算編成時の基準財政収入額と基準財政需要額を示してもらいたいと、補正にあたっての同じく基準財政需要額と基準財政収入額を示してもらいたいと、こういうふうに質問したはずでございしますが、それに対しての答弁が

ありませんので、これは質問じゃないですよ。答弁漏れですよ。続けられないじゃないですか質問が。

〇財政課長（長谷川広治君） 法人税につきましては、現在の時点でのいろいろ過去の実績等を計算をしていきますと、歳入欠陥はおそらくあり得ないというふうに考えます。

それから、基準財政需要額はのちほどお答えを申し上げます。

〇一四番（石井輝久君） あまり長くなりますので、これをもって質問を打ち切りますが、発言として私は非常に歳入面だけ取り上げて来年度今頃、出納閉鎖期を迎えて歳入欠陥のおそれがあるように思えてならないわけです。ですから、せっかく御努力なすって、そういうことのないように要望をいたします。

それからもう一点、これは質問じゃなく、私も先ほどの市長の答弁にもございましたけれども、市有財産を売り払うことが歳入を生む非常手段であると、残された唯一の手段であるというふうには理解していません。だから、売らなかったことの是非を論じたいというわけではなくて、ただ、議会で可決された四十九年度予算の執行にあたって、これほど重大な変更をなさったという事実と、それから先ほど企画課長さんの御答弁にもありましたけれども、議会で可決されたものであってもまだきまつてないんだという、そういう考え方を執行部が持ちてしたら、こちらでもそのように考えて今後まいりたいと思います。

少なくとも、議会で可決確定された予算の執行にあたってはもうちょっと、ことばをかえていえば忠実にというか、真剣にいいますか、執行にあたっていただきたいということを要望をいたしまして質問を終わります。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 私は繰り上げ充用の問題についてお伺いしたいと思うんですが、その前にただいま石井議員のほうからの質問が出たんで、関連があるので一つ伺っておきたいと思うんですが、教育長の答弁の中に契約の第二項ですか、一中の敷地は当分の間何人にも売らないという契約をしているようですが、二中の払い下げ問題と一中の敷地との関係がどうして出てきたのか、その点の一つお伺いしたいと思います。

〇教育長（安田豊作君） 先ほど、石井議員さんの御質問にお答えしたように、二中の敷地を中村さんから買い受けるという必要性については永久校舎建築のためでございます。承諾書を得るためでございます。その交渉の過程で二中の敷地を売るならば一中が移るといふことも聞いているのだから、それを交換をするといふことはできないのかという話が交渉の過程であつたわけでございます。

しかし、その問題については議会、その他の関係の皆さまの了承を得なければいけないし、市長個人の独断でそういうこともできないんだというような話し合いが内々なされました結果、一中の問題を売らないという条項が、一つの何人にも売らないといふ一つの条件によって覚書が取りかわされた。こういう経過でございますけれども、それで、おわかりでございましょうか。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 経過はわかるわけですが、二中の問題に、一中と交換するといふようなことを一応話し合いの上でそういうことはできないんだというふうに話し合われたのが、どうして契約書の項目の中に当分の間売らないといふことを入れなければいけなかったのか。これはちゃんと契約書の項目の中に入っ

いるわけですよ。供託したというのは結局こういういきさつがあって、そういうことになったのではないかと思うんですが、そのへんは関係ありませんか。

今の中一の敷地を当分の間売らないといったのが、三月予算では売るといふように出たわけですよ。そこに食い違いがあるわけでしょう契約と。二項では当分の間一中の敷地は売らないんだという契約をしていながら、三月の予算では一中の跡地を売り払うという予算に計上が出てきたわけです。そこらの問題があるから支払いについて五千六百九十七万六千円、こういう第一回の支払いを中村さんが受け取らないというようなことでの供託というふうになつたんではないんですか。そこらのいきさつがあつたんではないんですか。それをお伺いしたいんです。

○教育長(安田豊作君) 覚書の第二項にあることはありますけれども、一中の土地の売却と二中の土地の購入とは一本では、この覚書ではそういう感じでおとりになるかもしれませんが、市では一本でつながっての考えではないと私は思っております。

これは、一中建築の際の土地の人たちとの話し合いの問題もあります。それから市全体の財政の事情もあります。そういういろいろのことからこの三月予算に一中の土地売り払いの計上というものが出たことも一つ考えられますが、これは直接私のほうが担当ではございません。ただ、この覚書の中でつめて考えるならば当分の間という、当分の間というのは時間的にはないわけでございます。これは法律的にいろいろ解釈ができるわけでございます。そして、そういうことで、この覚書の中から考えるならば、そういうことはありますけれどもただこれが直通に一本の話で、一中の

土地の売却と二中の購入とがつながって考えられるということではないと、私は私のほうの立場からは考えているわけでございます。

○一八番(渡辺軍治郎君) この問題は、昨年の議会でもかなりゆりれい会社が入札の申請をしているというようなことで、かなり疑惑をもつてみてきたわけですが、それは一応おきまして。

市長さんの先ほどの石井議員に対する答弁の中で、一中の敷地は相当高い利用度といいますが、市にとっては非常に重要な土地なので売らないと、変更したと。本間さんとの引き継ぎの関係で半沢市長は一中の跡地は売らないというふうに御答弁になつたようですが、そのように理解してよろしいかどうか。

○市長(半沢良一君) 今後、さらに有効な利用方法がないかを検討したいと申し上げているわけで、売らないと申し上げているわけではございません。なるべくならば、売らない方向で進めたいというふうには考えておりますけれども、高度の利用方法を検討すると、そういうふうに考えているわけでございます。

○一八番(渡辺軍治郎君) 先ほどの答弁で売らないほうがよいというふうにはつきり答えたと思うんですが。そういう点で、これからの問題もありますから、ひとつその点をはっきりしておきたいと思うんですが。

それから、問題は、これは前任者の本間さんが三月予算議会に提案したわけですが、一中の現在使用している土地は、これは一般の普通財産ではないわけですよ。行政財産です。行政財産は地方自治法の二百三十八条の四項で売り払うことができないということになってるわけですよ。そういう売り払うことのできな

い土地を予算収入に計上したということについて、市長はどのようにお考えになっていますか、これは前任者のことですが、現在の市長はどのようにお考えになっていますか。

○市長（半沢良一君） 売らないほうがいいと考えたと申し上げましたけれども、それはこの三月の時点では、四十九年度の予算を執行するにあたって、三月の時点では従来の市会の意向等も参照にいたしまして売らないほうがいいというふうに考えたわけでございますけれども、今後この高度の利用をはかっていく上においては売ることも、そのほうがいいという場合には考えられないうわけではないというふうには考えておりますが、いずれにいたしましても、これが一中を移転いたしますのは三年先になりますので、その間に十分な考慮を検討いたしたい。そう考えております。

行政財産売り払いにつきましては、これは再々財政当局のほうから御説明申し上げておりますように、行政財産を一般財産に移管がえをするならば、売却することも可能だというふうに考えております。

○一八番（渡辺軍治郎君） 先ほどの市長の答弁が、三月の時点ではいろいろの財政事情を考えて売らないほうがいいという、そういう判断で、現在はそれとは違うんだ、これからいろいろのことを考えて、一中の移転も三年先のことだから、その間に考えるというところで売るとか、売らないとかそういう考えはないように見受けられますが、しかし、三月の時点で考えたとしても、これは行政財産です。行政財産は地方自治法で売れないということになっているのに、それをなぜ売り払い予算に組んだかということをお

聞きしたわけですよ。それとの関連あるわけですよ。市長はそういうふうには考えてないわけですよ。行政財産は売り払うことができないんだということでは気がついたので売らないということではなくて、三月の時点でいろいろのことを考えた上で売らないほうがよいということですから、そこにだいたい考え方の違いがあるわけですよ。その点一つ。

○市長（半沢良一君） ただいま御答弁申し上げましたように、渡辺議員の御質問は、これは予算の当初からの渡辺議員の御趣旨のように承っておりますが、それに対します市当局の答弁も再々申し上げていきますとおり、行政財産を一般財産に移管するならば売ることができる。そういうふうに現在私はそう考えております。

○一八番（渡辺軍治郎君） それは普通財産にかえた場合の話であって、四十九年度の予算ですよ。単年度の予算に現在使用中の行政財産、これは売ることではできないわけですよ。先にいって財産の普通財産への変更というよりなことがあれば、その時点で問題は出てくるはずのものです。その年度の予算を組んで、その年度に執行しなければいけないというのが予算の編成だと思っております。それを将来、そういう一つの仮定ですよ。移転した場合には普通財産に移行できると、だから、その土地は売れるんだというようなことでは話が違ふと思っております。

四十九年度の予算に計上したわけですから、四十九年度に執行ができないということは、当然これはできないはずなんです。行政財産は売ることができないんですから、売ったら当然背任行為になるんですから、この点をどういうふうに御理解になっているんですか。

〇 助役（畠山 伝君） お答え申し上げます。

四十九年度当初に予算を組みましたときには、おっしゃるよう行政財産そのものでは売ることができませんけれども、これを普通財産に配置がえしまして、それを一時借りまして、それで行政財産という形で使っていくこともできるというような見解でこれを計上させていただいたわけでございます。

〇 一八番（渡辺軍治郎君） どうも、はっきりしないんですが、年度の予算に計上する場合は、地方財政法でも歳入の問題について相当厳格に「収入は適実かつ厳正に、これを確保しなければならぬ。」という地方財政法の四条の二項があるわけですよ。

ですから、予算組む場合には、そういういいかげんな、先にいって普通財産にかえれば売れるというようなあいまいなものではないと思うんですよ。だから、昨年の議会でも相当この問題は論議されてきたわけですが、結局年度末で減額補正ができないで、繰り上げ充用という形をとったわけですよ。

だから、一番問題は、売ることのできない行政財産をなぜ売るということで予算収入に組んだのか。そこを聞いているわけですよ。今の答弁では普通財産にかえてからとか何とかいう、そういう問題ではないわけですよ。単年度予算ですよ。そこをどういうふうにお考えになっているんですか。

〇 助役（畠山 伝君） お答え申し上げます。

普通財産にかえてということは、この建物ができて引越してからということをお願いしてはございませんでして、現在建物が建っておりましても、それを行政財産として使用しておりますけれども、それを行政財産を廃止して普通財産にして売却し

て、それで、その場合に買い主から借り上げるといふような形で考えたわけでございまして、絶対にできないものを計上いたしたものではなかったわけでございまして、そのへんひとつ、御了承いただきたいと思います。

〇 一八番（渡辺軍治郎君） その問題では、これは非常に重要な問題ですから、そういうふうにしてその年度で普通財産に変更ができる、あるいは借り上げとか、そういうような買い戻すとか、そういうことができるという法律といえますか、根拠はどういうところにあるか、教えてもらいたいんですが、このあれではないわけですよ。地方自治法には。

〇 財政課長（長谷川広治君） 事務的なことでお答えを申し上げます。

予算に編成をする。あるいは計上をする時点で売り払いを決定するということのような行政手続ではございませんで、土地の売り払いをするという事件的な決済をもって決定をするということが事務的な手続でございます。

したがしまして、実質的に予算に計上いたしまして予定をいたしたわけでございますが、その時点でも違法ということではないわけです。問題は、売る時点で普通財産か、行政財産かということであろうというふうにお考えしております。

私どもは、市有の建物、市有の土地でなければ公用財産あるいは公共財産ではないというように解釈ではなくして、人の土地であっても、建物であっても公用廃止という一つの意思表示をすれば、それは行政財産あるいは公用財産になるんだということでございます。

したが、いまして、これは売り払いの時点でございますが、その時点で公用廃止をいたしまして普通財産に編入をする。そして、普通財産で売却をし、その売却後、その財産を借りて行政財産として使用をするということは、法律的には可能であります。したが、いまして、予算編成をそのような考え方でいたしたわけでございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 予算編成でそういうことができるとしても、実際売り払い時点でそれが行政財産か、あるいは普通財産かというような認定が出るというふうにいわれますが、もう最初から一中は現に行政財産として使用しているものであって、三年先にはかなければあそこがあかないということは、はっきりしているわけですよ。だから、使用中のそういう行政財産を四十九年度末になって売り払い場合には、それが行政財産か、普通財産か、そこをきめるといっても、はっきりそれは最初からわかっているんじゃないですか。その点はこういうふうにお考えになっていますか。

〇財政課長（長谷川広治君） 手続の関係でございますので、私どもは違法ではないというふうに考えておりますが、前回やったときに自治省等も訪ねまして、違法ではないというような解釈をいただいてやったこともございます。さしつかえはないものと思っております。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 自治省の見解を聞いてやったということですが、地方自治法の中ではそういうようなことはくわしくは出てないわけですよ。出ていたらひとつ教えてもらいたいと思うんですが、そういうことがないと、相当問題は、結局不測の事態

だと思ふんですよ。これは今まで繰り上げ充用というふうなそういうことをやったことにはないわけですよ。こういう不測の事態を生んだということの責任はまぬがれないと思ふんですよ。結局、三億円以上の繰り上げ充用をするというふうなことは、これはそのときだけで済まずに、今後の館山の財政に大きな影響をもっているわけですよ。そういう点での私は財政当局に責任があると思ふんですが、その点はこういうふうにお考えですか。

〇市長（半沢良一君） 私が市長として、市長の責任において売らないことにきめたわけでございます。それが将来にわたって影響の及ぼさないように今後、極力努力をいたすつもりでございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） ちょっと、質問のあれが違うと思うんですが、これは財政、前任の市長さんのやったことですから、しかし前任の市長がやったとしても、財政当局がこれは引き受けてやったと思ふんですよ。だから、三億円を越すような繰り上げ充用をしなければならなかった。四十九年度の予算執行についてこれだけの赤字を出しているわけですよ。そういうことに対する、要するに予算執行上の問題として財政当局は責任を感じないのかどうかということなんです。それをお伺いしたわけでですよ。

これは、今後のやっぱり財政運営の上で、この赤字が三億円を越えるというふうなことになりますと、これはこの補正予算の中にも出ていますが、将来にわたってこの穴埋めをどういうふうにやっていくかということでは相当大きな尾を引いているわけですよ。そういう責任を一体どういうふうにお考えになっているのか、聞いてみるわけですよ。

〇市長（半沢良一君） 私が売らないことにきめましたので、その

結果、赤字が出たわけでございますから、これは私の責任でございまして、財政当局の責任ではございません。

私は、ただいま申し上げましたように、私の責任において今後そういう影響の及ぼさないように努力をいたしたいと、そう考えております。

〇一八番（渡辺軍治郎君） この問題は釈然としない問題があるわけですよ。

行政財産と普通財産の、その時点で、実行の時点できめるとかなんとか、そういうようなことができるのかどうか。法令をみてもわからないし、行政財産はとにかく売ることではできないことははっきりしているわけですから、それを売るような予算を組んだというところに問題がある。私はそういうふうにみていますのでこの問題については今までの答弁では釈然としないわけです。

したがって、今申し上げましたように、この三億円の赤字が出たということで、この補正予算みますと、先ほど石井議員が指摘したように、かなり法人税についても相当あまい見通しをもっているのではないかと、今、不況の中でどっちかといえば法人税が減るようなことを、そういうようなことを相当考慮しなければいけないような問題もあるわけですが。

私は、歳出の面について減額補正のかなり大きなものがあるわけですよ。その内容についてお伺いしたいんですが、一一ページの農林水産業費の減額補正が二千二十五万ですか、減額補正があります、この説明では、船形、富崎漁港改修工事の負担金になっていますが、一体、この事業は一年繰り延べのようになるといいます、どういふお話ですが、結局工事そのものがこの赤字のために

だんだん、だんだん繰り延べられていくのではないかと、いようなおそれもあるわけですよ。

それからもう一つは、道路橋梁費の一億千五百七十四万八千円の委託料の減額補正もありますが、こういうような減額補正が今後の事業計画を進めていく上で、また五十年の事業を進めていく上で具体的にどういふ影響が出てくるのか、そういう問題について御説明願いたいと思います。

〇財政課長（長谷川広治君） 漁港関係の負担金の繰り延べでございしますが、これによりまして実際の工事の事業量に減額あるいは影響を及ぼすということではございません。

それから、たとえば道路等の工事委託料を翌年度に延ばすというような場合、翌年度の財政的に影響を及ぼすのではないかと、いような御趣旨のようでございますが、確かに減額と申しますか繰り延べした分については影響があると思います。が、翌年度予算の伸び、そういうものから考えまして、何とかやりくりして編成はできるのではないかと、いふふうに考えております。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 来年度以降の問題のような御答弁ですが、五十年度は結局この漁港の改築工事はストップということになりますと、今まで大体漁民の人たちが待ち望んでいたそういうようなことが一年先に延ばされるといふようなことで、五十年度はこれはストップということが考えられますが。

〇財政課長（長谷川広治君） 全然、工事の進捗度合いにつきましては関係ございません。ただ、金をお払いいたしますものが、市は五十年度のものを五十一年度に支払うというだけの措置でございします。

以下、道路の關係もそのように御了承いただきたいと思ひます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 以上で、質問を終わりますが、一中跡地の、いわゆる行政財産の売却問題について、これを現に使っていても売り払う時点で普通財産かどうかと、公有財産を普通財産にかえるということが、現に使用中のものでできるかどうか。そういう点については全く答弁では了解できないので、その点をはっきりさせて質問を終わります。

〇財政課長（長谷川広治君） 私どもの考えではさしつかえはないというふうに考えております。

それからなお、先ほど石井議員さんの御質問にのちほどお答え申し上げますというふうに保留をいたしております基準財政収入額と需要額の關係でお答え申し上げます。

需要額が二十二億八千六百五十七万五千円、収入額が十三億一千七百七十万五千円これはもちろん予定額でございます。補正後というような御質問のようでございますが、普通交付税については補正をいたしてございませんで、これがこのまま使用されております。

〇一五番（辻田 実君） まず第一点におきまして、先ほど質問の中でもってかなり明らかにされてはきておりますけれども、歳入の法人税の問題でございしますけれども、二千二百万の補正についてでございますけれども、かなりやはり無理があるんではないかというふうに思われるわけでございしますけれども、その点について再度伺いたいわけでございます。

と申しますのは、四十七年度、八年度の予算と決算の状況をみてみますと、四十七年度においては、法人税につきましては当

初予算で七千五百万なにかしがあるわけでございまして、収入済額につきましては六千六百万なにかして当初予算を上回ることできておりません。

四十八年度の決算額についてみますと、当初予算についてはほぼ四十七年度の当初予算と同額の七千五百万なにかしてございます。端数のわずかな増でございしますけれども、この年につきましては一応いろいろな事情があったわけでございまして、特別交付税等のあれがあったようでございまして、この年につきましては八千九百万ということであつております。

しかしながら、四十九年度の予算についてはこの差額とほぼ同額の八千九百万が計上されておるわけでございしますけれども、もう一度お伺いしたいわけでございしますけれども、本年度の決算見込みというんですか、一番近い調定をする段階でもって出されたところの収入済額の額は、四十九年度どのぐらいにほぼ固まりつつあるか。もうほとんど帳じりにきておりますので、その数字を教えていただきたいというふうに思ひます。それをまず第一点、御質問申し上げます。

〇財政課長（長谷川広治君） きょうまで実は移動があるわけでございしますが、大きな移動はおそらくございませんので、大体私どもが現在つかんでいる数字が最終調定額ということになろうと思ひますが、一億三千百六十五万この程度が最終調定額になろうというふうに考えております。

本年度分でございますが、まだ一カ月しか調定がされておらないわけですが、約本年度二七％程度伸びております。四月分だけで、法人税につきましては徐々に調定率が上つていくのが例年の

しきたりでございますので、大きな伸びはございませんが、歳入
欠陥はおそらくないというふうに考えております。

〇一五番(辻田 実君) それと関連いたしましたして、この三億を繰
り上げ充用するわけでございますので、五十年度の予算に対して
どのような影響がされるかということが一番心配になるわけでご
ざいます。

そこで、これはあくまで目安でけっこうでございまするけれど
も、四十九年度が一番近くのところでけっこうでございまするけ
れども、決算見込み額というんですか、どのぐらいになっている
のか、わかる範囲で一番新しいところの数字、見込みは大体どの
程度になりそうだという見込みでけっこうでございますが、そ
う正確のものでなくて、アウトラインがわかりましたら教えてい
ただきたいと思ひます。

〇財政課長(長谷川広治君) 当初予算から約三千万程度の上のせ
と申しますか、伸びがある程度で決算が結了するのではないかと
いうふうに考えております。

〇一五番(辻田 実君) わかりました。

私は、昭和三十八年に議員になったわけでございますけれども
そのとき以来繰り上げ充用ということは一度もなかったわけでご
ざいます。かなり今回のような状況はあったかみられるわけで
ございますけれども、ちょうど私が議員になります半年前に本間
市長が就任されて以来、十二年間の間にはそういう方向がなくて
他の方法をもちながら今日に至ってきたわけでございまするけれ
ども、繰り上げ充用という状態、これは館山市において過去にあ
ったのかどうか、そうして過去にあったとすれば、いつ頃ど

の程度の繰り上げ充用がされたのか。非常にごく最近のことにつ
いてははじめてのことでございますので、その点わかりましたら
教えていただきたいと思います。

〇財政課長(長谷川広治君) お答えを申し上げます。

二十九年度と三十年度に繰り上げ充用をいたしてございます。
二十九年度におきまして繰り上げ充用をいたしました額は二千四
百十三万四千円、これは端数切り上げでございます。

それから三十年度が繰り上げ充用の額が一千四百十五万二千円
これが行なわれておりまして、自来繰り上げ充用はいたしてござ
いません。

〇一五番(辻田 実君) この繰り上げ充用というのは最近の例と
しまして二十九、三十ということでございますので、二十年ぶ

りということになるわけでございますけれども、この当時の人を
云々ということは非常にむずかしいわけでございますけれども、
繰り上げ充用という、こういう予算処置そのものについてはどう
しても単年度では処理できないというんですか、処理しにくいと
いう状況がありやしないかどうかと、たまたま二十九、三十とい
うことでもって当時の金としまして、二十九年度が二千四百万な
にがしと、三十年度が一千万なにがしということとで約半々ずつこ
れが解消されておるようにみえます。今の額の価値からいって、
これがどの程度のものに匹敵するか、ちょっと試算できませんけ
れども、やはり予算規模からいきますと、今日のものとそうか
わらないぐらいの、三億ぐらいに匹敵するんじゃないかというふ
うに思ふわけでございますけれども、繰り上げ充用というのはや
はり単年度で解消できる、五十年で解消できるというふうな見

込み、そういうようなことができるものかどうか。

これは、先ほど一八番議員の渡辺さんのほうの質問に対して、市長は自分の責任でもって行なったことなので、責任で解決するということをおっしゃってやったわけでございますけれども、解決するのは当然のことであって、解決されなければたいへんなことでありますので、この責任で解決ということはどういうことなのか。端的にいうと、一つは単年度なのか、二年なのか、三年なのか、そのへんについて十分の検討はなされたのかどうか。この点十分討議されたことと思いますので、その点についてはどの程度の目安を組んだのか。

その目安とともに一番重要なのは、今日の物価上昇特にスタグフレーションという現象の中において、昨日の新聞をみますと物価の上昇は一四%を上回ってしまった。特に先月、先月の物価上昇をみると、一〇%でおさまることは困難だろうと、酒、たばこ、国鉄運賃、郵便、その他の公共料金の値上げ等をみていってなかなか困難だ。こういうことが政府の発表でもって明らかになっておるわけでございまして、そうなってくると、この予算に対して昨日の討論の中でもそうでございしますけれども、市長の姿勢は、どうも金の帳じりだけに目が向けられておりまして、事業内容というものについては若干あまやかしじゃないかという感がまぬがれないのでございます。

そういう意味において、私は責任においてこの三億の繰り上げ充用を解決するにあたってやらなければならないような文教、福祉、こういったところの事業、さらには今市民が非常に困っておるところの水道、道路の問題、下水、排水こういったようなものが

たな上げされる中において、そうしてこの繰り上げ充用が解消されていくというようになりますと、非常に問題も大きくなってくるわけでございまして、その点の心配がわれわれ議会人といたしましても一番懸念されるところでございまして、そういう意味におきましては、まとめますと、今申しましたように、どのような方法で、どのぐらいの期間をかけてこの繰り上げ充用の解消にあたるのか。

二点目は、今申しましたように一般的に予算、公共事業費等これについての事業に影響はないか、特に今日の、昨日、一昨日発表されましたところの政府発表の物価上昇、そうしてその総論の部分にいわれておりますように、スタグフレーションはますます進んでおるといふ政府のこうしたところの前提の上に立った今日、今年、来年にかけての見通しを含んで十分お考えになったと思うわけでございしますので、その点をひとつくわしく御答弁のほどをいただきたいと思います。

○財政課長（長谷川広治君） 赤字解消と申しますか、繰り上げ充用いたしました額を何年度で消化できるかという趣旨の御質問と承りましたが、大体二十九年度におきます二千四百万の繰り上げ充用額は、当時の予算が一億六千万程度でございします。したがって、一五%程度というふうに考えますが、それを現在に引き直しますと、約七億近くなろうと思ひます。

現在、繰り上げ充用いたしました額は三億でございます。それも大半が土地の売り払いを執行しなかったためのものでございまして、二十九年度、三十年度の赤字の原因とはその内容を異にしております。したがって、私どもは五十年度中におきまして

ほぼ完全消化をいたしたいというふうに考えておりますが、先ほど申しましたとおり、国の経済の状況に應じまして、やはり地方財政は影響を受けるわけでございます。

この間、総務委員会でも御説明申し上げましたが、四十五億の中で本当に市が一〇〇%自由な収入ができるといえますものは財産収入だけでございます。あと、市税から始まりまして一切のものが大なり、小なり制約を受けているわけでございます。そのような中で地方財政でございますので、国の経済の状況あるいは制度の改変によって、われわれの考え方がらつとかわつてくるわけでございますが、現在の状況でいえば大体五十年度におきましてほぼ解消できるのではないかと、ただ、八月に出ます人事院勧告によります給与改訂を私どもは一、二%か、一、三%程度というふうに予定をいたしております。これが一五%程度になりますと、二、三%の財源不足が生ずるというふうになるわけでございます。これと、景気の状態がもう少し先にならないというところ、はつきりいたしません、現在の予算編成の状態からいけば、五十年度中にはほぼ完全消化をいたしたいというふうに考えて、そのように編成をいたしてまいりたいと思っております。

〇一五番(辻田 実君) その経過、数字については了承しましたけれども、この問題については昨年の四十九年度予算の中で審議されたわけでございます。そしてその中において、議会といたしましては、先ほど市長がいわれましたように、土地は売却せずについていたいただきたいという要望が再三出されておったわけでございます。

当時、本間市長は、売却せざるを得ない。すると、売却すると

いっても新しい土地を買い、さらには館高の土地も買うんだから八千坪前後の土地を売ったということになると、それは非常に耳ざわりけれども、しかしながら、新しい土地を生むんだということと交換ということで考えれば、なにもそれはいいんではないかという、こういう当時の答弁があったわけでございまして、現に館山高校の取得さらには一中の用地については先行取得をしておったわけでございますから、その点については若干の問題があるにしても、そういう態度の本間市長であったわけでございますが、この対立につきましては、昨年三月議会の議事録についてはほとんどその点に終始されてあるんじゃないかというふうに考えておるわけでございます。

その方向といたしまして、先ほど市長が議事録を参照されておったようでございますけれども、昭和四十九年の三月議会の議事録八号の八ページの上段のほうに、予算審査特別委員長田中禄郎の報告の中に、委員会報告ということでもってこまめにまとめられております。そうして、その中において三月に土地を売却すると、その時点において開発公社に売るか、競争入札にするか、そういう問題について結論を出したいという方向が出ておるわけでございます。

ちょうど、三月議会は私は議席を持っておりませんでしたので細かい経過はわかりませんが、後日もらった予算書さらに市長の所信表明の演説の中においては、この一土地売却についての事後処理の問題についてはほとんど触れられておりません。触れられておらないということは、私は議会の今までの経過、質疑の経過の中からいって、この三億円についてはある程度解消で

きたという判断があつたんじゃないか、これは私だけかわかりませんけれども、突如として、それも土地代金そのもの三億円のもの、土地が売れなかつたということでもって出てきたということについて、その間の市に対するところの、これに対処するところの努力がなかつたんじゃないか。どのような努力をしてきたのか私は非常に疑問を持ってやまないのでございます。

特に、四十九年度予算については議会の意向を受けて儉約するところは儉約し、そうして必要なところについては必要な予算を補正しているわけでございます。何度かの補正予算が組まれたわけでございます。本間市長の時代さらには半沢市長になってからも補正予算が組まれ、そうしてある程度の事業の消化にあたつたわけでございますけれども、結論的には、当初予算に対して三千万ぐらゐの予算増しかみられなかつたということでございますから、この三千万ではとうてい三億の解消にはならなかつたというような数字が出てきますけれども、しかしながら、今までの議会に対処するところの補正予算の編成、その他議会に対処するところの提案、すなわち五十年年度の予算案等についてこのような赤字繰り越しをしなければならないというような事態があるからには、そうしたものについてもうちと触れてよかつたんではないか、なぜ触れなかつたのか。触れない事情、触れられない事情があつたのかどうか。そうして、繰り上げ充用というのはその簡単にやつていいのかどうか。そこらへんに対する考え方が理解できないわけでございます。今まで昭和二十九年、三十年間に繰り上げ充用をして以来約二十年間やつてこなかつたということについては、繰り上げ充用の方向があまりいい方法じゃないん

じゃないかということが、やはり館山市政の中においてはあつたんじゃないかというふうに考えられるわけでございますけれども、そうした点について、市長はどのようにこの土地売却を中止を決意をして以来、この解消のために四十九年度つとめたのか。さらに、三月には売るか、売らないかをはっきりさせると、その上で慎重審議をするということがいわれておるわけでございますけれども、その方向はどういう慎重審議をされたのか。市長自分の責任においてやつたということでございますけれども、この種の問題は市長の責任でもって処分する問題じゃないんじゃないか、むしろ議会の意思によつて、特別委員長報告等があるわけでございますから、こうした面について答えないということについては議会無視ということをいわれてもしようがないんじゃないか。そういう姿勢で今後の市政を運営されたのでは非常に困るわけでございます。私は以上のような観点に立つて二点。

すなわち、すでにわかつておつたところの一中売却をしないために生ずるところの収入減に対処して、どのような解決策をとつてきたのか。

そうして二番目には、今申し上げましたところの三月時点において売るか、売らないかをはっきりさせるといふことが議会の議決をされておる中において、三月議会でもってなぜ売るか、売らないかをはっきりさせないで、今日に至つてただいま渡辺議員の質問の中においてはじめて売却しないんだということが突如として出てくるというようなことは何であつたのか、二カ月有余にわたつてそうした決意の表明が遅れたところに対する市政に対するところの影響が出てこないかどうか。その点について市長の明解

なる御答弁をいただきたいわけでございます。

○市長（半沢良一君） 御質問にお答えいたします。

議会に対する報告がなかったということでございますけれども、三月議会におきまして渡辺議員の御質問にお答えいたしました、一中土地売却問題についてはもう一べん考え直してみたい。売ること一つの方法かもしれないけれども、もっと高度の利用方法がないか、売ることも含めてもっと高度の利用方法はないか。財政事情が許すならば売らないで済ませたいというようなことを御答弁申し上げているわけでございます。

その財政事情でございますけれども、いろいろ財政当局とも、いろいろ相談いたしましたんですが、先ほど財政課長から御答弁申し上げましたように、五十年度の繰り上げ充用をいたしまして、五十年で、単年度で解消できるだろうという大体の目安を立てましたので、繰り上げ充用をお願いいたすことにしたわけでございます。

○一五番（辻田 実君） 昨年、議会の要望といたしまして、予算委員会といたしまして、この処分については開発公社云々ということがあったわけでございますけれども、この件について市長は開発公社と協議されたことがあるかどうか。そして、今までについては道路の新設さらには温水プールの建設、中央公園の造園これらについては開発公社を通じて行政の推進をされてきたわけでございますけれども、この開発公社に対するところのそうしたところの姿勢というものはかえたのか、どうなのか。これは本間市政の独得の政治手腕であり、またそのことによって、むしろ開発公社の借入金があつても一般の公共事業、さらには特に文

教、民生については金を惜しまずに使ったという方向があつたわけでございますけれども、そうした面については、私は開発公社についての関係、そうした面は本間市長の、とにかく金がないために公共事業、教育、福祉が遅れたことは取り返しがつかないからやるということをやつてこられたことについては、非常に大きな転換が出てくるんじゃないかということでございます、その転換については私はけっこうでございますけれども、先ほど一番の石井議員がいわれておりますように、転換がないのだという中で、そうした面の大きな文教、福祉ということじゃなくて、公の議会でございます。政治の基本的なそうした財政運用、予算執行の中において出てきているんじゃないかというふうに思われるわけでございます、そういう観点から、三月をめどにしたところの売却問題、そしてこの繰り上げ充用に選ぶについて、開発公社の資金運用というように、比較検討されたのか、どうなのか、それはどういう機関と、どういう場でされたのか。この点についてひとつ経過を説明していただきたいと思うわけでございます。

○議長（吉田勇治郎君） 答弁を保留し、午前の会議は休憩し午後一時開会いたします。

午前十一時五十三分 休 憩
午後 一時 五分 再 会

○議長（吉田勇治郎君） 午後出席議員数二十六名、休憩前に引き続き会議を開きます。

答弁を求めます。

○市長（半沢良一君） 辻田議員の御質問にお答えいたします。

開発公社に相談をいたしましたかどうかという御質問でございますけれども、相談をいたしましたして、本年の三月大体開発公社の借り入れ残が十三億六千万ほどございます。四十八年に一時十四億幾らになったこともございましたが、その後新規事業を行ないませんし、徐々に減る方向に向ってきていたわけでございますが、三月末の時点では十三億六千万ほどでございます。

借入金、御承認いただいております最高額は十六億四千万でございます。ここでさらにまた三億を借りるということになりますと、金利が大体九・二五%から九・八%の間でございますので、三億の借り入れをいたしますと、約二千八百万前後の金利を払わなければなりません。そういう状況でございましたし基本的に考えまして、辻田議員御指摘のように開発公社が果たした役割というものは、単に文教、民生だけでなく、市政全般に対しまして果たした役割というものは、私は高く評価すべきだと考えておりますけれども、経済情勢が非常にご存じのような状態で変化してまいりまして、スタグフレーションのような時代になってまいりましたので、その際、こうした高い金利負担を払うということをするということが、本来の目的でございました先行投資の意味にも必ずしも即さないではないか。そういうような考え方でこういうふうにいたしましたわけでございます。

開発公社のあり方につきましては、前市長の本間さんの考え方に私は基本的には賛成でございますけれども、やはりただいま申し上げましたように、経済情勢の変化、歳入の伸びが大幅の伸びがみられる時代と違ひまして、そう大きな歳入の伸びをみられなくなりまして現在では経済情勢がかわっておりますので、十分検

討して今後の運営を考えていかなければならない。そんな考え方も含めまして決定したわけでございます。

〇 一五番 (辻田 実君) その点についてはわかりました。

今、三億借り入れ云々ということでございますけれども、これまで歳入について善処されたわけでございますので、すなわち一億七千七百万というのは収入を見込んだわけでございますから実際の借り入れについては一億二千八百万ということになるわけでございますから、今いわれましたように、この程度のものでしたら何とかなるんじゃないか。

特に、この中におきましても、開発公社の支払いの繰り上げが一億一千万あるわけでございますから、実際に処理すれば繰り上げ充用しなくても、この際、わずかな借入金をもってやれば、三月議会等において補正でかなり埋めるといふ処置は取られたような気がするわけです。これは外部にいと、取られるような結果論であつたかも知れないけれども、そう見受けられます。一億七千七百万の収入を見込んだわけでございますから、そうして、実際には繰り上げするあれは一億二千八百万、そのうち一億一千万という開発公社の未払いということと済んだわけですから、あとわずかでできたようなわけでございますけれども、そこには何らか政治的意図があつたのか、ないのか。これを明らかにしていただきたいと思うわけでございます。

と申しますのは、確かに今、市長の答弁のように開発公社の借り入れ残額が十三億六千万ということで、約三億弱の残は残っておりますけれども、減らすという方向これはもっとだと思ひますけれども、その方向を重視したのか。

もう一つは、ここで二十年來の繰り上げ充用を行なうことによつて、市の職員また市民に対して財政が逼迫してゐるんだ。こういうようなことを訴えようという意思があつたのか、どうなのか。この点について私は結論的に、総合的にどういう考へであつたのか、お伺いしたいわけでございます。

そして、もう一点つけ加えておきますけれども、今回は市長の交代ということでございますので、非常に大きな御世話になるかも知れませんが、前入者がかなり十二年間にわたつて努力されてきたわけでございますので、その半年間においてやはり繰り上げ充用をするということによつて、前任者がやはり赤字を三億出すような投げやりのなものをやつたんだということのせしりをまぬがれないという面も私はあると思うんです。

そういう面については、やはり市長を中心いたしましたして、前任者の功績そういうものについて、單なる表彰ということではなくて、財政面からも三億ぐらいの繰り上げ充用をしないでも済んだんだ。飛ぶ鳥あとをにござずというようになことの始末という面が市長を中心にして執行部当局になつたのか、どうなのか。むしろこの面については、結局は無理な財政でもつて三億穴をあけましたよということをも市民乃至は市内の職員に対して与える結果になりはしないか。現に私はそういうふううに受け取つてゐるわけでございますから、そのことはやはり、私は非常に政治上の一つの倫理というんですか、そういうような信義というんですか、そういうものからいって私はまずいんじゃないか。まずいことをあえてやらなければならぬというところに相當の決意もあつたと思ふんですが、そこらへんがまだ十分伺われないので、その点も含

わせて御質問したいわけでございますけれども、ひとつ率直な御答弁をいただきたいと思ひます。

○市長（半沢良一君） お答えいたします。

一億七千七百七十四万の追加の歳入があるじゃないかというお話しでございますが、三月の時点ではこれは見込めなかつた数字でございまして、現在になつてこういう数字が見込まれるようになったわけでございます。そのときの段階では、ただいま辻田議員御指摘のような操作はできなかったわけでございます。

繰り上げ充用をいたすについて政治的な意図があるのではないかと、御指摘でございますが、一切ございません。

前任者でございます前本間市長さんへの思いやりが足りないんじゃないか。政治的配慮が足りないんじゃないかというお話しでございますが、確かに人情論としてはそういうことがあるかも知れませんが、私は市長がかわるということとは、ある意味で気分を一新する。政治に対する、市政に対する気分を一新することでもありますし、やはり実態を明らかにすることのほうが、より鶴山市の将来に向つて、将来の発展に向つて、そのほうが正しいんだという政治的な信念に基づきまして、繰り上げ充用をいたしましたわけでございます。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。――御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本案については委員会の付託を省略いたしましたと思ひます。こ

れに御異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○議長(吉田勇治郎君) 御異議なしと認めます。よって、決しました。

討 論

○議長(吉田勇治郎君) 討論に入ります。

○一八番(渡辺軍治郎君) 私は、議案第四十四号昭和五十年年度館山市一般会計補正予算に反対の立場から討論をしたいと思ひます。

その理由は、質疑の中で問題になりました三億五百八十二万二千円の繰り上げ充用についてですが、これがこの補正予算のかなり大きな問題になったことは質疑の中でも明らかだと思います。この繰り上げ充用、これは不測の事態ですが、こういうことをやらなければならなかったもとに、行政財産の売り払い問題があります。

財政課長の説明では、行政財産を売り払う時点で普通財産にかえることもできるから、予算上に計上することは違法ではない。こういうことをいっておりますが、地方自治法の二百三十八条の四の規定では「行政財産は、次項に定めるものを除くほか、これを貸し付け、交換し、売り払い、譲与し、もしくは出資の目的とし、またはこれに私権を設定することができない。」と、はっきり行政財産の取り扱いについて、売り払ったり、私権を設定することができないということをきめております。ただし、その二項では国や、あるいは地方公共団体との間では用途を政令で定める用途に供させるために、政令の定めるところによってこれを貸し

付け、またはこれに地上権を設定することができるということとで非常にこの行政財産の取り扱いが嚴重に限定しているわけです。

だから、実際には、現実の問題として一中の跡地を、現に使用している行政財産ですから、それを売り払うことができないということは自治法からみてもはっきりいえることだし、見通しの上からいっても、これを四十九年度の議会のたびに見通しはどうかということを追及してきたわけです。

そういう立場からみて、この繰り上げ充用が、そういう行政財産の処分ができなかったためにできた収入不足を借入金、そういうことでまかなうというふうな、こういう補正予算になっているわけですが、こういうことから考えて、私は財政課長が先ほど説明した二百三十八条の四に規定する行政財産の取り扱いについては納得することができません。

また、三億以上の繰り上げ充用をすれば、当然これは四十九年度の赤字決算となるわけですから、これを解消していくためには当局の説明では五十年年度中には解消したいというようなことをいっておりますが、そうなりますと、当然五十年年度の予算もすでに組まれております。こういう中で、三億円以上の金を出さなければならぬということになりますと、当然五十年年度の歳出面へのしわ寄せが出てくる可能性があるわけです。

そういう点からみますと、今後の財政運営というものがかなり市民の立場からみれば、非常に市民の要望にこたえられないような、そういう状態が出てくる懸念もあるわけです。そういう点からみて、この補正予算、この中には減額補正で分担金とか、委託金の一時繰り延べがありますけれども、こういうふうにただ、分

担保だけでは済まないという問題が出てくる可能性が感じられますので、この補正予算に賛成するわけにはまいりません。

○議長（吉田勇治郎君）

他に賛成の討論ございませんか。

○一二番（栗原一雄君）

議案第四十四号昭和五十年年度館山市一般会計補正予算第一号に賛成するものでございます。

今までの質疑で了解できたわけでございますが、昭和四十九年度における土地売却に伴う見込み額である歳入欠陥によるものであり、金額的にはきわめて大きな額の補正でございますが、昭和四十九年度における歳入が、歳出に對しまして不足が生じており会計年度の独立の原則から申し上げ、これが例外となるわけですが、地方自治法施行令第六十六条の二により処置されたものであり、売却予定地である一中、現在市の教育財産として使用いたしており、出納閉鎖期の最終日となる五月三十一日現在におきましても、歳入見込みが立たない現況から判断し、前年度繰り上げ充用金は非常手段として法的に認められたものであり、処置されたものでございますので、諸般の状況からやむを得ぬものと考え賛成いたしますのでございます。

○議長（吉田勇治郎君）

他に反対の討論ございませんか。

○一四番（石井輝久君）

議案第四十四号に對しまして反対いたします。

その理由は、昭和四十九年度予算の執行にあたりまして、半沢市長さんは議決された予算に重大な変更を加え、しかもみずから私の質問に答えまして、この予算を議会に提案された本間前市長さんの路線に変更なしと、明らかに矛盾する答弁をされたわけでございます。

予算の執行にあたり、議会の議決を尊重せず、議会を輕視し、

三億円にもぼる重大な変更を加え、あまつさえ補正しようとする歳入面で、法人税、特別交付税の見積り過大とみられる増額をし年度内の歳入欠陥の憂いをまぬがれない本案に對して反対し、議員各位の賛成を得たく反対の討論とするものでございます。以上。

○議長（吉田勇治郎君）

他に賛成の討論ございませんか。

○一五番（辻田 実君）

質疑の中でかなり明らかにされてきておりますように、この補正予算については最近例をみない方法で、すなわち繰り上げ充用というものを採用しまして提案されたものでございます。

この手続的な面につきましては、四十九年度予算委員会の委員長報告等の趣旨が十分生かされておらなかったことについては非常に不満を持つ者でございます。

しかしながら、五十年で解消するということ、さらには文教福祉をはじめとするところの五十年の予算については影響がないように責任を持って対処するという答弁がございましたので、この面については絶対的賛成というわけにはいかないわけでございます。繰り上げ充用というものを採用したことは幾つかあった中において繰り上げ充用というものを採用したことについては、やはり新市長としての所信だろうということと今回の繰り上げ充用に對しては賛成をしたいと思うわけでございます。

しかしながら、要望といたしまして、私はこの繰り上げ充用を行なうところの政治的影響すなわち先ほどの答弁の中にございましたように、欠陥は欠陥として、そしてわるいものは明らかにわるいといえますか、こういう状況は状況として明らかにしてい

くんだという形の中で処理されるということでございますのでその手腕のほどを期待をいたしまして、そういう要望と期待を託しながら本案については賛成をするものでございますので、ひとつ今後の予算執行におかれましては、十分先ほど質疑されましたような内容について配慮されることを要望いたしまして、賛成討論といたしたいと思います。

○議長（吉田勇治郎君） 他に討論ございませんか。――討論なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 採決に入ります。本案に対する採決を立により行ないます。本案に賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

○議長（吉田勇治郎君） 起立多数。よって、本案は原案どおり可決されました。

議 案 の 上 程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第二、議案第四十五号昭和五十年年度館山市水道事業特別会計補正予算を議題といたします。

議案第四十五号 昭和五十年年度館山市水道事業特別会計補正予算（第一号）

質 疑 応 答

○議長（吉田勇治郎君） 質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） 借入限度額を一億五千万円から二億五

千万に、限度額の補正ですが、五十年年度の水道特別会計の予算をみますと、大体三百十六万八千円の赤字ということが盛られていますが、三芳水道からの水の原価がトン当たり六十円になったので、大体それを計算しますと九百万ぐらいの赤字になる見込みが私の計算では出るわけですが、三月の予算議会のときに、そういう赤字予算の中で、たとえば今困っている宮城水道、この夏の時間給水というような、そういう問題をそのままにしておいてやるのかどうか。そういう問題について、こういう市民が困っている問題を解決するための事業計画、そういうものをやるために財源費をすべきだということを討論の中で申し上げたはずですが、そういう観点からみまして、現在の館山市の給水状況をどのように把握されているのか。その点についてお伺いしたいと思います。○水道課長（大嶋重義君） 現在の市の水道の給水状況でございますが、これには水源との関係が大きな関連があるわけでござい

ます。現在、中央水道におきましては、水源が山本と真倉にございまして、これは地下水でございまして、公称能力は六千トンということでございますが、実際には五千トン前後ぐらいじゃないかと思

います。それから、宮城水道は貯水池でございまして、貯水池の量が五万一千トンでございます。

それから、西部の簡易水道でございしますが、これは井戸が四本で一千トンでございます。

それから、西岬の水道でございしますが、これは波左間と見物に

あるわけでございますが、これも全部井戸でございますして、これが八百トン。

それから、南部の水道が、これが川をとめたダムが一万一千トンに、井戸が二本でこれが約三千トンということ、南条水道が井戸が一本で自噴のもので四十トン。

これで、心配なくやっていけるのが南部簡易水道と西部簡易水道でございます。あとのところは水源不足とか、それから配管上の問題とか、夏急激に入ってきて需要がふえるために、需要供給の関係がとれなくなつての水不足が出てまいります。

こういうようなことでして、現在中央水道におきましては三芳水道から約九百トンから一千トンぐらいの水を補いをつけておるわけでございます。宮城の水道につきましても実際には貯水池には水がありますけれども、いろいろ配管上やら、地理的な理由がございまして、現在でも西岬の水道から補給を受けて大賀、笠名がまかなわれておる。こういう状態でございまして、南条水道だけはこれは自噴の井戸でして、あそこちゃんとポンプを入れてあと二、三十トン使えれば足りるわけでございますが、周囲の地元からも承諾を得られないで、自噴をかううじて使つておるという事で、給水車で配水池に運んでいるわけでございます。

現在、中央水道におきまして、一部末端の地域でございしますが館山小学校の裏のほうだとか、上須賀の高台の一部とか、柏崎、宮城付近こうしたところにピーク時に減水あるいは一時的な断水が起きているという状況でございます。現在のところ、夏までこの状態が続くと思いますが、これが夏になりますというと、急激に需要がふえまして、西岬それから宮城につきましては、やはり

時間給水をせざるを得ないじゃないか。このように思っております。

ただ、渡辺議員さんから前から宮城地区の水道につきましての手当てをというお話し、ごもつともでございますが、なんせ水道は今、防衛庁の補助で作名ダムをつくっておりますけれども、水道建設には順序をいたしまして、まず水源確保のダムなりをまず確保する。その次にはそれを衛生的に処理する浄水施設をつくる。その次に配水施設と、こういうふうになっておりますので、そうした順序を違えて配管工事をやるということになりますと、これについては補助だとか、起債とかそういう関係についても何らございせん、しかも相当膨大な金額がかかりますので、現在のところではそれだけを先行することは非常に無理だということでございます。

これにつきましては、あの地区の方々とも話し合ひまして、作名ダムさえ一日も早くでき上れば、それまで御不自由でもできる限りの努力をするのでござんぽうくださいということと了解は取りつけてあるわけでございますが、それにつきましても、こと、水のことでございますので、私どもは一生懸命全力投球によりまして、とにかく根本的に解決するのは作名ダムでございまして、これに向つてまい進みたい。このように思っております。

〇一八番（渡辺軍治郎君）　ただいま、給水状況が説明されましたが、問題なのは房州水道を買収して中央水道になったわけですが、この配管関係の中で、今でも水の出ないところがあるわけですね。これは青柳とか、下真倉の新しくできた団地とか、市内でも二階とかちょっと高いところは今でも水が出ないというよりな苦情が

出ております。こういう問題を、水というのはたいへん大事なことでですから、それを放置していくということは、水道事業は公営一本化になって、市民は公営になったんだから水が出るようになるだろうという大きな期待を持っていると思うんです。ところが実際には房州水道でやった配管に問題があるのではないかと。たとえば、本管からすぐに引けばおそらく水が出ないということはないと思うんですが、非常に細い管から枝をはやしてやるようなことになれば、どこかで水を使えば末端部は出なくなるのはあたりまえですから、そういう房州水道は、かなり何といえますか、営利的な面もありますから、無理な配管をしているんじゃないかと思うんです。そういう点を把握して、その配管関係は改良とすれば、その膨大な予算を出さなくてもできるんじゃないか。今問題になっているようなところは、私はすぐやる必要があると思います。

それからもう一つは、宮城水道の問題ですが、貯水池に水があっても配管の関係で宮城、笠名、沼あへの人たちが水に苦しむということは、これは天災ではないわけです。雨が降らないで水源が枯れて水が回らないということなら、これはやむを得ないんですが、実際には貯水池に水があって、配管が細くなって、鉄管であかやなんかで口径が非常に細くなったために水が出ないということを知っているながら、それを放置していくということはこれは市営水道である限りでできないと思うんです。そういう配管関係をかえて水が出るようになるというようにすることにしないと水道料金を値上げするといっても、水の出ない水道に料金を値上げするということはとても話ができないと思うんです。そういう

点を市長はやる気があるのか、ないのか。今いった配管関係のことです。相当大的な問題ですから、一時借り入れの限度額一億円ふやしています。そういう予算措置はこの財源でやってもらいたいと思うんですが、できるのか、できないのか。そこらの点をはっきりしてもらいたいと思います。

○水道課長(大嶋重義君) ただいまの配管の関係でございますが房州水道の施設ももう四十年近くたって、たしか古いわけですが、私どもも四月に引き取りまして、そうした配管上の関係だとか、それからメーター器の関係だとか、あるいは施設基準に合っているかどうかとか、いろんな観点にわたって調査をしかけておるわけでございますが、現在のところ、第一回の検診という作業をようやく終ったわけでございまして、配管関係につきましては十分な調査が終っていないわけでございます。ただ、終っておりませんけれども、当時房州水道が引く時分には、当時のメーソパイプそのものについては一応適正な管で配管されたものと思われま。

実際には、房州水道は加入者がなくて困って、前市長がやられた当時もいろいろと長い間苦勞されて、赤字時代を乗り越えてようやく今日にきたという、よく苦勞話を聞かされるわけでございますが、エタニットパイプがメインパイプとして入っているわけでございまして、そのものがわるくて大きな漏水事故があったというようなことは会社自体からも、またこっちが引き取ってから聞いておりませんし、現在まで出ておりません。今、房水で出ているのは、家庭内に引いていく鋼管なんかで腐食したりということでの漏水が出ております。

もう一つ、官城の關係でございますが、これは前にも御説明しましたんですが、当時軍が配管したものでございまして、実際には配管図が引き継がれてないわけでございます。ですから、それがどこを通過して、何ミリが入っているのかも実際にはわからないのが現状でございます。

たまたま、状況をみますというのと、前にもいいましたように、水道管は配水池の元のほうから太いのから徐々に細くなっているんですけども、あそこには途中あたり二百ミリできて、次にヘビが卵を飲んだように三百が入ってあったり、しかもあれは鋼管でございますので、中が相当腐食したり、スケールがついて内径は実際には半減しているような状態で、したがいまして、そうした水圧の關係も水道の水理学のとおりにはこれがいけないということと、それから官城の浄水場は一日最大六百トンが限度でございます。実際には六百トン出ているんですが、官城、大賀、笠名地区が非常に最近住宅地として市営住宅もできますし、個人の住宅も相当できておりまして需要がふえております關係、特に下のほうの大賀の關係は、引く当時はまるきり家がなかったところに自衛隊の官舎、市営住宅等ができてきた關係で高低差がありまして、その關係が非常にむずかしい關係で、したがいまして、私どもは夏以外は全部西岬の水を相当電気代がかかって引いておりまして、いろいろ苦労してやっております。現在、官城、笠名地区においてもそうしたことで断水とか、そうしたことでの御迷惑はかけないつもりでございます。ただ、夏場にいった一カ月ばかりが非常に困りますが、西岬の状態がよければ、佐野の水を西岬に回わし、西岬の水をこちらに回わすという、市営水道につきまし

てはドンキングができておりまして、過不足に應じましてやりくりしておるということでございます。

この根本対策は、どうしても作名ダムができますと、これはダムだけでなく、浄水施設から一貫した配管設備も、元は四百ミリです。房州水道、三芳水道よりさらに太い管を、館山小学校の上のほうのあのへんで三百五十で通っていきますので、これを西岬まで太いものでもっていきます。

今までの館山の水道は房州水道あり、簡易水道次から次につくった關係で、末端は五十とか、七十五のパイプでつながれているというところで、そういう關係にも欠陥があるわけでございます。それを、防衛庁の補助でメインパイプを太いので西岬まで回わしていこう。それで、一挙に解決したいというのが私どもの念願でございます。

〔「了解、了解」と呼ぶ者あり〕

〇一八番（渡辺軍治郎君） 課長さんの説明で、官城水道の貯水池には水があるのに、水が回らないんだということで、水があるのに配管の關係で水が出ないということなら、原因がはっきりしているわけですよ。しかも、ヘビのようにふくらんだところと細いところで、鋼管でもって口径が狭くなっているとか、そういうことをつかんでいるわけです。つかんでいてその手当てができないというのは結局、これは怠慢になるわけです。問題はそういうことなんです。配管の關係が水道課でもって、図でもってどういうふうになっているかという実情をつかんでないと思うんですよ。

青柳の最近できた、池田不動産がつくった住宅団地のまわりは

今でも水が出なくて困る。こういう苦情が出ておるわけです。あれは最近でしょう。市が買収するちょっと前でしょう。

房州水道の今までやってきたことというのは、八幡、湊に水道を引いてくれといつて房州水道に申し込んでも、水源が足りないからますます赤字になる。だから、三芳水道に区域変更したわけでしょう。そういうところかなり問題がある。そういうのを市が買収したんですから、しかも一億で買収したということですから、買収した以上は市が責任を持ってやっぱりやる必要があると思ふんですよ。

私は、そういう水道事業の、たいへんな仕事なんだということ考えたから、日本水道協会のきめた買収価額でそういうマイナスを引いて差し引き勘定やれというのをいったのも、市が財政が困難の中でそういう水道を引き受けるという立場からみればそういうことをやっていかなければならないということを考えていたわけです。

だから当然、市がわかっていてやらなければならないところはこれは作名ダムが完成しないうちでも、市民のそういう困つておる問題にこたえるためには、これは観光上もやる必要があると思ふんです。水の出ないところに観光客きませんよ。夏になつても館山市の将来発展させるために一番大事なそういう問題が手がつけられないということでは困るわけですね。だから、この一億円の借入金的那种いう財源をそういうところに使うことができるのか、できないのか。そこをひとつお聞きしたいと思ひます。

○水道課長（大嶋重義君） 今回、計上いたしましたものはこれは財源ではございません。予算財源ではございませんで、予算の範

囲内での資金繰りにちょうど困りますので、この程度の限度額をお許しをいただきまして、資金繰りをやらしていただくということとでございます。そのものがほかのほうにさらに予算がふえて使うということではございません。

これぐらいの予算が、一億円の財源があれば、もっと私ども市民が困つておりますので、そうした面に大いに使わしてやっていきたいと思つておりますけれども、私ども精一はい日も早く水道を何とかして市民の皆さまが困らないようにやっているわけでございますので、よろしくお願いしたいと思ひます。

（「了解、了解」と呼ぶ者あり）

○一八番（渡辺軍治郎君） 苦勞しているのはわかりますが、借入れの限度額ですから、事業計画を組むにはまた補正予算出てくると思ふんですが、今いったような市民の困つてゐる立場を考へて資金繰りをやるべきですが、そういう点で十分考へてやつてもらいたいと思ひます。

○一六番（安西益男君） ちょっと一点、お伺ひしたいんですが、今水不足がたいへん大きな問題だ。これは御承知のとおりであります。特に今、一番解決策はということになりますと、今課長さんがおっしゃつたように作名ダムの完成しか実際のところはないう。予算はということになりますと、これはたいへんな問題でございますから、そういったことで何にしても予定どおりに作名ダムが完成するかどうかという、その見通しをきちつと教えていただきたいと思ふんですが。

○水道課長（大嶋重義君） 作名ダムの完成の見通しでございます

が、ダムは今年度五十年度からコンクリートの本打ちが始まります。来月からコンクリ打ちを予定しております、その工事そのものはこのまま進みますと、来年の夏にはダム本体は完了する予定でございます。

なお、ダムができました、さっきお話ししましたように、大きく分けますと、施設別には淨水施設が一つあります。これには沈んで、ろ過、配水池と、

(「できるか、どうかを」との声あり)

これが私どもの自主計画では三カ年計画ということで、昭和五十一年度末完成、すなわち五十二年三月末には完成いたしたいというところで計画しておりますけれども、これが防衛庁の補助予算でやっております、防衛庁の補助の出しぐあいと申しましょるか、当初私どもの計画よりだいぶ総需要抑制とかそういう関係で予定どおり出ておりませんので、あとのほうにだいぶしわ寄せになっておりますので、現況では五十一年度末完成は財源的にもそういう裏打ちがなければ無理じゃなからうかと思っております。

〇一六番(安西益男君) これは結論的には、市長さんにお伺いしたいわけですけれども、たいへん大きな問題でございますので、防衛庁の予算が主体であるということだけに、防衛庁との折衝これは本気にやっていたかなければいけないと思いますが、これが延びることになりますと、いろいろ新設の加入者さんどもふえておりますから、市営になったということ加入の面のほうも多くなっております。これが現状でございますので、これが仮にはつきりしないままに延びることになりますと、たいへん問題が大きな問題になるんじゃないかと考えられるわけですが

本気にひとつ取り組んでいたきたい。市長さんの、相当の決意をもってこの完成にのぞんでいたきたいわけでございますが、市長さんとしてもそういう結論的な見通しはどんなふうにお考えになっていらっしゃるか。それをお伺いしたいと思います。

〇市長(半沢良一君) お答え申し上げます。

安西議員さんの御指摘されるまでもなく、水が市民生活の基本的な生活の条件であることは申すまでもございません。その重要性につきましては私も十分考えて、市政の最重要目標にしなければいけないと考えておりますが、ただいま水道課長から話がありましたように、どうも防衛庁の予算のほうが思うとおりにはもらえないような状況に、最近になってそういう状況になりましたので、これは極力防衛庁等かけ合ひまして、その予算の獲得につとめたい。そうして市民の要望にこたえたいと、そういうふうに考えております。

これは今、私たちも予定どおりいかどうかということについてのお答えは、そのような状況のもとではちょっと責任ある御答弁はいたしかねますが、こん身の努力をふるって目標どおりできるように努力いたしたいと思っております。

〇一六番(安西益男君) 水道課長さん、ごく最近の防衛庁との折衝の状況ですね。それを一つお聞かせ願いたいと思います。

〇水道課長(大嶋重義君) 防衛庁との折衝でございますが、つい十日ほど前にも四十九年度の事業の確認に担当係等がこられたわけでございます。

そのときのあれを聞きまして、市長はじめ私どもも市の置かれてある窮状を訴えまして、とにかく予定どおり、計画どおりや

ってもらいたいということを強く訴えたわけでございます。

防衛庁の話を聞きますと、東京施設局管内でもってある予算が十二、三億だそうでございます。その中で、二億近くのを館山に予定しているだけでも、管内では抜群の補助の額だということとでございます。今の国の財政事情からするというと、現況では相当きびしいということで、あとは自分たちのほうでも市の実情はよくわかったんで、上のほうにそういうことはよく伝えるとともに市のほうでもそうした面については、また上のほうにも働きかけるとか一生懸命やってもらいたいということもいわれたわけでございますので、今後こうした獲得の面で、さらに議会の皆さんやら、上司の方々の御指導をいただいて検討いたしたい。このように思っております。

〇一六番（安西益男君） 御努力されているということは十分わかりましたので、積極的になお一そうお願いしたいと思うわけです。市としての予算上の面は、作名ダムにかかる予算はそれは当然そのまま進めてやっていくということになりますか。

〇助役（畠山 伝君） お答え申し上げます。

現在の市のほうからの一般財源のことだと思えますけれども、これは現時点ではその額で進んでまいりたい。かように考えております。

〇議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。――御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

〇議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本案を委員会の付託を省略いたしたいと思えます。これに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

〇議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって、決しました。

討論に入ります。討論ございませんか。――討論なしと認めます。

採 決

〇議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。

本案を原案どおり可決するに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

〇議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって、決しました。

閉 会

午後一時五十七分閉会

〇議長（吉田勇治郎君） 以上で、本臨時会に付議されました案件は議了されました。

よって、これにて第三回市議会臨時会を閉会いたします。

〇本日の会議に付した事件

一、議案第四十四号、議案第四十五号

地方自治法第二百三十三条第二項の規定により署名する。

館山市議会議長

青田 常任

館山市議会議員

奥戸 寿夫

館山市議会議員

石井 正

